



NoAti:

夏日漱石
帶平夜

登場人物

ナレーター

庄太郎

女

大勢（親類・友達）

◆行方不明になっていた床太郎が、7日目の晩に帰ってくる
◆ナレーター

庄太郎が女に攫われてから七日目の晩にふらりと帰って来て、急に熱が出てどっと、床に就いていると云って健さんが知らせに来た。

庄太郎は町内一の好男子で、至極善良な正直者である。ただ一つの道楽がある。パナマの帽子を被って、夕方になると水菓子屋の店先へ腰をかけて、往来の女の顔を眺めている。そうしてしきりに感心している。そのほかにはこれと云うほどの特色もない。

あまり女が通らない時は、往来を見ないで水菓子を見ている。水菓子にはいろいろある。水蜜桃や、林檎や、枇杷や、バナナを綺麗に籠に盛って、すぐ見舞物に持って行けるように二列に並べてある。庄太郎はこの籠を見ては綺麗だと云っている。商売をするなら水菓子屋に限ると云っている。そのくせ自分はパナマの帽子を被ってぶらぶら遊んでいる。

この色がいいと云って、夏蜜柑などを品評する事もある。けれども、かつて銭を出して水菓子を買った事がない。ただでは無論食わない。色ばかり賞めている。

二場

◆庄太郎が、水菓子を買った女についていき、不思議な体験をする
◆ナレーター、庄太郎、女

ある夕方一人の女が、不意に店先に立った。身分のある人と見えて立派な服装をしている。その着物の色がひどく庄太郎の気に入った。その上庄太郎は大変女の顔に感心してしまった。そこで大事なパナマの帽子を脱って丁寧に挨拶をしたら、女は籠詰の一番大きいのを指して、

女 これを下さい

と云うんで、庄太郎はすぐその籠を取って渡した。すると女はそれをちよっと提げて見て、

女 大変重い事

と云った。

庄太郎は元来閑人の上に、すこぶる気作な男だから、庄太郎ではお宅まで持って参りましょう

と云って、女といっしょに水菓子屋を出た。それぎり帰って来なかった。

いかな庄太郎でも、あんまり呑気過ぎる。只事じゃ無かろうと云って、親類や友達が騒ぎ出していると、七日目の晩になって、ふらりと帰って来た。そこで大勢寄ってたかって、

大勢 庄さんどこへ行っていったんだい

と聞くと、庄太郎は

庄太郎 電車へ乗って山へ行っただ

と答えた。

何でもよほど長い電車に違いない。庄太郎の云うところによると、電車を下りるとすぐと原へ出たそうである。非常に広い原で、どこを見廻しても青い草ばかり生えていた。女といっしょに草の上を歩いて行くと、急に絶壁の天辺へ出た。その時女が庄太郎に、女　ここから飛び込んで御覧なさい

と云った。底を覗いて見ると、切岸は見えるが底は見えない。庄太郎はまたパナマの帽子を脱いで再三辞退した。すると女が、

女　もし思い切って飛び込まなければ、豚に舐められますが好うござんすか

と聞いた。庄太郎は豚と雲右衛門が大嫌だった。けれども命には易えられないと思つて、やっぱり飛び込むのを見合せていた。ところへ豚が一匹鼻を鳴らして来た。庄太郎は仕方なしに、持っていた細い檳榔樹の洋杖で、豚の鼻頭を打った。豚はぐうと云いながら、ころりと引つ繰り返つて、絶壁の下へ落ちて行つた。庄太郎はほっと一息接いでいると　また一匹の豚が大きな鼻を庄太郎に擦りつけに来た。

庄太郎はやむをえずまた洋杖を振り上げた。豚はぐうと鳴いてまた真逆様に穴の底へ転げ込んだ。するとまた一匹あらわれた。この時庄太郎はふと気がついて、向うを見ると、遥の青草原の尽きる辺から幾万匹か数え切れぬ豚が、群をなして一直線に、この絶壁の上に立っている庄太郎を目懸けて鼻を鳴らしてくる。庄太郎は心から恐縮した。けれども仕方がないから、近寄ってくる

豚の鼻頭を、一つ一つ丁寧に檳榔樹の洋杖で打っていた。不思議な事に洋杖が鼻へ触りさえすれば豚はころりと谷の底へ落ちて行く。覗いて見ると底の見えない絶壁を、逆さになった豚が行列して落ちて行く。自分がこのくらい多くの豚を谷へ落したかと思うと、庄太郎は我ながら怖くなった。けれども豚は続々くる。黒雲に足が生えて、青草を踏み分けるような勢いで無尽蔵に鼻を鳴らしてくる。

庄太郎は必死の勇をふるって、豚の鼻頭を七日六晩叩いた。けれども、とうとう精根が尽きて、手が蒟蒻のように弱って、しまいに豚に舐められてしまった。そうして絶壁の上へ倒れた。

二場

◆ 庄太郎から聞いた話を話し終えた健さん。
◆ ナレーター

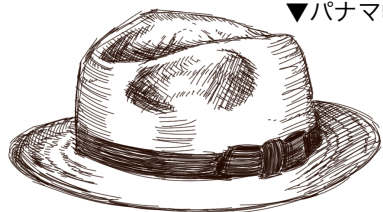
健さんは、庄太郎の話をごままでして、だからあんまり女を見るのは善くないよと云った。自分ももつともだと思つた。けれども健さんは庄太郎のパナマの帽子が貰いたいと云っていた。

庄太郎は助かるまい。パナマは健さんのものだろう。

〈完〉

1 場

パナマの帽子：^{ぼうし}「パナマ帽」と呼ばれる夏用の帽子です。麦わら帽子のように植物を編んでつくられています。周囲につばがついていて、真ん中がへこんだ形をしています。戦前、紳士の夏の正装として愛用されていました。



▼パナマ帽

水菓子：^{みずかし}果物のことです。果物は昔、菓子の一種とされていたために、「水菓子」と呼ばれました。現在ではさまざまな果物を安く買うことができますが、明治時代、果物の多くは高価で貴重なものでした。

水蜜桃：^{すいみつとうもも}桃の品種のひとつです。明治時代に中国から輸入され、裁

培されるようになりました。実が大きく、ジューシーで、甘いのが特徴です。現在日本で食べられる桃は、ほとんどが水蜜桃を品種改良したものです。それまで日本で栽培されていた桃は、甘さがほとんどなかったため、甘い水蜜桃は、大人気だったようです。

2 場

閑人：^{ひまじん}暇な人。これといった用事がなく、昼間からぶらぶらしている人です。庄太郎は働かなくても食べていける、名家の人なのかもしれません。

絶壁・切岸：^{まりぎし きりぎし}切り立った崖のことです。「絶壁」は通常、「ぜっぺき」と読みます。「断崖絶壁」といったりしますね。「切岸」も崖のことですが、鎌倉時代から戦国時代にかけて、敵の侵入を防ぐために人工的に作った崖のことを特に指す場合もあるようです。

豚：^{ぶた}イノシシを家畜化した動物です。日本でも、弥生時代から豚を飼育し、食べていたそうです。江戸時代には豚肉食が一旦下火になりましたが、明治時代に入り、再び一般化しました。きれい好き、知性の高い生き物としても知られています。

雲右衛門：^{くもえもん}明治時代に実在した浪曲師・^{とうちゅうけんくもえもん}桃中軒雲右衛門のことで、1万5千円（現代のお金で1億円相当）の出演料でレコード盤に浪曲を吹き込み、後にそのレコード盤をめぐる、ドイツ人と著作権を争う裁判を起こしたという記録が残っています。相当な人気者、かつ先進的な人物であったことがうかがえます。

檳榔樹：^{びんろうじゆ}インドネシア・マレーシアを原産とするヤシの仲間の植物です。竹のように繊維が束になっていて、とても硬いのが特徴です。表面はチョコレートのような

色をしています。種を噛むとリラックスできる作用があるため、タバコとして愛用する地域があります。

黒雲に足が生える：^{くろくもあしは}「黒雲」は、雨を降らす黒い雲です。「黒雲に足が生える」というのはこの作品独特の表現ですが、黒雲は一般的に塊になって押し寄せてくるものですので、一斉に押し寄せる豚の大群を黒雲にたとえ、それに足が生えたよう、と表現したのでしょう。また、文学において、黒雲は不吉なことの前触れとしてよく使われます。

無尽蔵：^{むじんそう}いくらでもあること、いくら取ってもなくなるということ。

必死の勇：^{ひっしゆう}「必死」は死にものぐるいなこと。「勇」は勇気、いさまいなこと。つまり、「必死の勇」とは、死にものぐるいでいさましく振る舞うことです。

こんな夢を見た。



という書き出しで有名な『夢十夜』。夢、という体裁をとった十編の短編小説集です。内容はひとつひとつがバラエティに富んでいます。例えば、なぜか鎌倉時代の仏像師・運慶が明治にあらわれ、その手つきに感化

された主人公も仏像を彫りはじめてみるがまるでモノにならない……という「第六夜」のとぼけた味わいから、夜中に子供をおぶって延々田んぼと森を歩いたすえ、その子から自分が殺人者だと告げられる……ホラーテイストの「第三夜」などもあります。けれどやっぱり白眉は、幕明けの「第一夜」でありましょう。



『夢十夜』は、やっぱり「第一夜」!

布団に横たわり「もう死にます」と告げた美しい女。百年後にまた会う約束を交わし、数えきれない日と星が巡るまで待ちつづける……というロマンティックなこの話。百年経ってやっと一度会う約束は、単純計算で七夕の100倍ロマンティックですね。「百年はもう来ていたんだな」と主人公が気づくシーンの美しさはぜひお読みいただきたいところで、『夢十夜』といえは「第一夜」のイメージだけ持っているかたも多いはずです。

そうして始まった短編集が、このような最後を迎えるとは誰が予想したでしょう……。快活で怠けもので、綺麗な女性に目のない「庄太郎」が、美女について行った先で7日間、アタと格闘しつづける……。はるか地平線からすべてを埋めつくすアタの群れ、「だから、あんまり女を見るのはよくないよ」という教訓にもならない一言、庄太郎への無慈悲なラストシーンにポンッと突き放されて、まさに夢から覚めるよう。このふり幅が、しかし『夢十夜』という短編集のふところの深さでありましょう。

なぜ「第十夜」!

元になったイメージとは

この「アタの群れ」のイメージには、元になったであろうものがあります。それは『新約聖書』のエピソード。「マルコ」(5章)、「ルカ」(8章)、「マタイ」(8章)の、3つの福音書に載っています。イエス一行が「ガラサ人の地」に行くと、おびただしい悪霊にとりつかれた男と出会いました。イエスは悪霊と話し合いのすえ、近くにいた豚の群れにのりうつることを許可。すると悪霊がとりついた豚たちは次々と崖から湖へ落ち、溺れ死んでしまった……という、イエスの悪霊払いの力を示す挿話の一つです。夏目漱石はイギリスへ留学し、英文学を研究していましたから、聖書の知識は並ならずあったでしょう。ちなみに「マルコ」の記述では豚は2000匹おり、まさに地平線も埋まりそう。なおこの一連、「マタイ」の記述は少し違い、地名が「ガダラの地」、悪霊につかれた男は「2人」となっています。中島らもさんの名作小説『ガダラの豚』がこのエピソードから題をとっていたり、悪霊たちの呼び名「レギオン」(古代ローマで「軍団」という意味)は、映画『ガメラ』の怪獣の名前になったりもしている、有名エピソードなのです。



劇団ののと読む 夏目漱石『夢十夜』より『第十夜』

この荒唐無稽な「第十夜」が聖書から喚起されたものだったとは! とはいえ、それが、なんなの? どう素敵な解釈に結び付けるかは、あなた次第です!

漱石の庄太郎びいき?

なお、「庄太郎」は、同名の人物が「第八夜」に登場しています。こちらの話の語り手は散髪を待っている最中。床屋の鏡に映った表通りを、

庄太郎が女を連れて通る。庄太郎は何時の間にかパナマの帽子を買って被っている。女も何時の間に拵らえたものやら。ちょっと解らない。双方とも得意のようであった。よく女の顔を見ようと思ううちに通り過ぎてしまった。



という、この「女」が「第十夜」の美女なのかもしれないし、あるいはまったく別人なのかもしれない……。ともかく、各編が独立している『夢十夜』の中でなぜか、最終話を予告するようなシーンが描かれているのでした。意外と大役、漱石は庄太郎に愛着があるんでしょうか。

「夢」を楽しむ

起きて見る夢(将来の夢?)と違い、寝て見る夢はあまりにも多様です。そして、人に話すほどでもない、わからない、どうしようもなくたらしいな夢も、

数多く見るものです。今回は、そんな「人に話すほどでもない夢」を思い出していただきたく、あえて美しい「第一夜」でなく、そのような、けったいな「第十夜」を選んだ次第でした。

それではさようなら。



この解説のはじまりでも触れました書き出し、黒澤明監督の映画『夢』でも引用されたこのフレーズ「こんな夢を見た。」は、実は使われているのは第一、二、三、五夜だけで、意外に十編中の半分もありません。(「第九夜」は「こんな悲い話を、夢の中で母から聞か」という締めなので、加えればちょうど半分ともいえます)

考えてみると、小説といういわば何でもありのフィクションの中で、「夢」を宣言することの不思議さもありますね。「夢」と言われて読むとなんとなく夏目漱石本人が主人公のような気がしてしまいますが……作品は色んな考えを待っているのかもしれない。

文・イラスト 栗田 ばね

Podcast ののラジオ
好評配信中！



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com/wp/archives/podcast>
ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののと読む名作文学 夏目漱石 『夢十夜』より「第十夜」 Podcast 版

発行日 2018年6月1日
著者 夏目 漱石
編集 劇団のの
発行 劇団のの
[http://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com](http://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。
底本 『夏目漱石全集10』筑摩書房
初版 昭和63(1988)年7月26日
初出 明治41(1908)年8月5日
図書カードURL
<https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/card799.html>

